

アトリエ訪問 第41回

玉川 宣夫 先生

金工(鍛金) 重要無形文化財保持者



編集・撮影
広沢隆則／市川正美
平成24年10月13日

まず初めに、先生が鍛金の仕事に携わることになったきっかけをお聞かせください。

きっかけはこの燕に玉川堂という会社がありまして、そこに私が養子に来たところから始まりますね。それも中学二年生のときに来たんですよ。私たちの世代だと、中学を卒業すると集団就職の時代だったのでね。当然、就職するものだと小さいころから思っていました。それがたまたま玉川堂に養子に来たので、それ以来、運命づけられたということです。

玉川堂に来られて、すぐに鍛金の仕事を覚え始めたのですか？

いやいや、中学生ですからね。最初は手伝い程度でした。普通に部活もしていたしね。そのかわり土日はない時分ですからね。そういうときになると駆り出されて、手伝ったということですね。

では、本格的に鍛金を始めるのはいつ頃ですか？

中学卒業後、秋田の専門学校に二年行っていたんです。金工の基礎的なことは、ここで学びました。卒業して帰ってきた十七歳で正式入社ですね。玉川堂は老舗なので、職人が二十人近くいるんですよ。通いの職人もいるし、住み込みの職人もいるしね。だから、職人を育てるシステムが完成しているんです。最初はいわゆる兄弟子の下仕事ですよ。チームを組むんですよ。例えばやかんが五十個注文、茶たぐが五十個注文、とかあると、ではやかんの部は親方はだれだれで、子はだれだれと。だから、社長とか販売のほうは別として、現場には工場長というのがいて、工場長が割り振りして、例えば私になら、「宣夫はじゃあおまえ、だれだれについてやれ」と。最初は何もできないから、指示を待っているわけだ。兄弟子が「なまし」とか言ったら「はい」、酸洗いするときは「酸洗い」、「はい」とそんなふうにして。それで、仕事がないときは「じゃあ、おれのやっているのを見ていけ」と。「見取りげいこというのも大事なんだ」とか言われてね。それで自然にリズムとかを覚えるんだね。

これは後の話だけど、上手に育てないと職人がへたばっちゃうんだね。いきなりハードなことをやると夏までもたない。四月から仕事を始めて、夏を乗り越えるのが一つの山なんだ。夏までもたないでくたばるようなことは、むしろ親方のほうが悪い。親方というか教えるほうがね。それを上手に教えていくのは、そのころは私はわからなかったけど、その後、教えるようになったらわかってきたね。

そういつた中で玉川先生自身も育てられたわけですね。

そう。それで、さっき言ったように、いろんなチームをつくるでしょ。いい仕事とつまらない仕事と、これをやりたいという仕事があるわけですよ。私は一応、家の人間だからわがままを言って、いい仕事というか、おもしろい仕事をとるわけ。同僚を押し分けてね。だから、割と早くいわゆる高級品に携わったけれども、そのかわり本当の職人としての仕事はちょっとおろそかになったかな。職人の仕事というのは1週間でも十日でも同じことをこつこつこつこつやるんだよね。そういうのが私は嫌だった(笑)。

それで、職人になって三四年で、一人前ではないけどまあまあ仕事を覚えたときに、やっぱり世間に目が行くわけですよ。燕という土地柄だと、金工の作家が多くいた。日展系が多かったけどね。だれだれが日展に入選したとか、そういう話を聞くので、興味がでてきて、そのころいろいろな雑誌を買ったりしてね。そのときに関谷四郎先生の商品が『芸術新潮』という本に載ったんですよ。やっぱり世の中には偉大な先生がいるなと思ってね。関谷先生のところに手紙を出しました。手紙には、とにかく「やる気はある」と書いたね。そしたら先生が「とにかく一遍来い」と。押しかけて弟子にしてもらったのが二11歳の時ですね。

あのころは住み込みの職人というか、弟子を入れるのが普



通だったんだよね。今は親方の都合で邪魔くさいから内弟子をとらないでしょ。通いならいいけどね。内弟子か通いの弟子かというのは相当差があります。さっき言ったように、玉川堂にも常に何人も住み込みの弟子がいたでしょ。すると、住み込みというのは要するに親方と一緒に御飯から何から一緒に生活するわけだね。関谷先生はその辺、おう揚な先生で、自分もそうやっていっちょ前になったんだから、いいよと。行ったときに、兄弟子に須戸さんがいてね。関谷先生のところで、二年間修行しました。

作家を目指すのはいつ頃のことなんですか？

作家を目指すのはちょっとまた違う理由で、要するに燕の中でいろいろ切磋琢磨して、うまい人もいれば、そうでない人もいるけれども、みんなやっぱり高慢になるんだよね。何を言っているんだと。おれは東京でこういう仕事を見てきて、燕でこうしようと思っていると言っても、だれも言うことを聞かないね。それで、では私も中央の展覧会に出して、みんなの胸を開かせてやろうという、そんな気で中央展に出し始めたね。さっき言ったように、日展系の人も何人かいたし、県展なんかにも常時出していた人もいたしね。とにかく玉川堂の仕事だけで、仕事を覚えるのも大事だけれども、展覧会に出せばまた違う勉強ができるでしょ。人の仕事を見たりね。

人の目が入るし、相対的に作品を見ることができますね。

そうです。それで伝統工芸展に出品するんだけど、運よく入ったりはするけど、入賞とかはしないわけだ。あのころは忙しかったから、本展しか出さなかったわけ。そしたら関谷先生にそれではだめだと言われた。新作展があるんだから、新作展に出してみろと。新作展に出したら、やはり運よく入ったりしてね。でもやっぱり入賞はしない。やっぱり燕に伝わる技術だけでは通用しないなと思って始めたのが木目金。それが三十歳のころだね。

関谷四郎先生の内弟子時代についてお聞かせください。

とにかく内弟子ですから、狭い借家で後ろのほうに三畳があって、私はそこを借りて、朝昼晩、同じ生活をしていたんだね。ただ、やっぱり田舎とは、時間の過ごし方が違うんだね。



玉川堂にいるときは朝の六時ごろ起きて、準備して仕事を始めて、一日中回されて、仕事が終わって八時、九時にやっと寝られるでしょ。関谷先生の家に行くと、そのつもりで六時ごろ起きて、音をたてていたら、うるさいからやめてくれと言われました。先生は九時ぐらいに仕事場へ入られるんだ。だから、それまでに掃除をしたり、道具を出したり、当然、食事はするなりするけどね。九時ごろからやっと先生も来て、思い切りトンカチトンカチ始めてね。夕方六時ごろには終わりになります。

鍛金の仕事で心掛けていることは何ですか？

一連の勉強をする中で、「鍛金家は塊から伸ばす技を覚えなとだめだ」ということが、何かの本に書かれていたんですよ。自分も本当にそうだなと思った。今はほら、我々の仕事は銅板なら銅板、一、二ミリなら一、二ミリ、電話一本で手に入るわけだね。玉川堂のずっと昔の先輩達はそういうものが無い時代には、塊からトッテッカン、トッテッカンやって、地金をつくってから器をつくったものでね。そういう話を聞いていたものだから、いずれ塊を打ってみたいなと思っていた。木目金を知ったとき木目金は塊なんだよね。最初に塊をつくるでしょ。これはいいやと思ってやったのが木目金制作のきっかけなので、塊を打つというのを大事にしています。

木目金についてお聞かせください。

木目金の場合は、うまくくつつくかどうかだね。

やっぱり最初の生地なんですか？

そうです。しっかりくつついてしまえば、後、相当荒仕事をやっても、もってくれる。それが蠟付とは違うところなんだよね。金属は、私の場合だったら、銅、銀、赤銅の三種類を使っています。銀を接着剤がわりに使うんだよね。融点が少し低いから間に挟む。だから、二、三枚の板金がこう一つになると、銀を十枚使うわけ。あと上、下、別だから。それを一まとめにからげて、炉で融解して金属同士をくつつけてしまうんです。電気炉を使う人もいるらしいんだけどね。私の場合は、溶ける色を見て判断しています。銀とはいえ、何か混じっていれば融点は変わるでしょ。数字で設定できないわけだ。やっぱり目で見て判断しないと。

のぞき穴をつくっておいて、そこから銀の色を見て判断しています。



木目金がうまくいかないとうなるのですか？

はじめは機械ハンマーを使って、どんどん打ってはなましを繰り返すのだけれど、厚みのあるときはわからないね。三ミリになってもわからない。それがいよいよ二ミリぐらいになってきてからなますと膨れるんです。中にごみが入っているか、空気が入っているか、それとも傷があるかね。薄くなるまでわからないので、それが困るところなんです。

正倉院宝物「銀燵炉」の復元についてお聞かせください。

ちょうど十年前。私が六十歳のときです。私と市川さんと般若さんと仕事をしました。般若さんは挽物を、市川さんには透かしをしてもらった。私の中では一番たいへんな仕事でしたね。自分の作品は自分の気持ちで決まるし、注文生産もお客を納得させれば良いわけです。でも復元はどこが最終点なのかかわからないところがあった。何度も本物と見比べて、苦勞して復元をしました。

若手の金工家にアドバイスをお願いします。

たいへんな道だけれど、途中でへたばらないで、やり続けてほしいということだね。やっぱり売れるものというのは変わってくるので、やっぱり食っていかなきゃどうしようもない

ので、要するに食っていけるものをちゃんとつくりながら、展覧会の作品をつくり続けてほしいということかな。

先生の今後の抱負をお聞かせください。

もう抱負なし(笑)。もう消えゆくのみ(笑)。

要するに、うちの先生もそうだったけれど、七十歳を過ぎて打物で前線、前を走っている人は今までいないと思う。もう腕力がなくなると、無理なんだわ。鋳物でもそうでしょ。さっき言った四キロぐらいの塊をつかみながらたたたくでしょ。それはもう重労働だから、体力がなくなればできない仕事なんです。人に下地をつくらせたりすれば話は違うけれど、さっき言ったように塊を打つというのが私の中のポリシーなので、それができなくなれば、もうやめざるを得ないんでね。

だから抱負といえるのかはわからないが、一日でも長く今のペースで続けていきたいということでしょうか。

本日はどうもありがとうございました。